

ハイレ・セラシエ帝政と

私の植物物語

橋本 陞

1958年2月上旬の夜羽田を発ち、香港、バンコック、ボンベイ(ムンバイ)を経由アデンで乗り換え、ジブチでエチオピア航空の双発プロペラ機に乗った。飛行高度は4000m以下で、ディレダワ付近では砂漠に注ぐ流れ川の両岸だけの緑の樹木とリフトバーレーの切り立った崖がはっきりと見ることが出来た。3日目にやっとアジスアベバに到着した。1956年11月に国賓として来日したハイレ・セラシエ皇帝は日本政府に数人の政府顧問、宮廷女官、農業技術者等の人材斡旋を要請した。行政・法律・経済関係の政府顧問、宮廷女官、果樹園芸技術者は翌年エチオピアに赴任した。私は造園・園芸技術者として1年遅れでエチオピアに着いたわけである。

Jubilee Palace (当時の迎賓館・現在の大統領官邸)での最初の仕事は、前任のイギリス人造園家がやり残した英国風庭園の完成であった。広い花壇にバラを植える準備のため、作業員に肥料を撒かせようとしたところ、これは葉かと聞かれた。彼らは肥料を知らなかった。粒状の肥料を撒かせると、とても慣れた手つきで撒いたのでこれはどうしたことかと驚いた。後日、アジスアベバ郊外にドライブに出かけて農民がテフの穂を蒔いている畑を見て納得した。農家出身の作業員は細かいテフの穂を蒔く要領で肥料を撒いたのである。

Eragrostis tef (Zucc.) Trotter 「テフ」はエチオピアの高原地方に住む人々にとってきわめて重要な穀物であるが、世界の中ではマイナーな穀類ではない。テフの穀粒はきわめて小さく、1000粒当たりの重量はわずか0.3gである。ちなみに小麦は約35g、キビは5g、ヒエは2.5gで小麦の100分

の1である。したがって、テフを蒔く畑は鋤で数回いてねいに耕さなければならないし、非常に小さな種(穂)を均等に蒔くためには相当の熟練が必要である。低地で栽培しているトウモロコシやキビのように突き棒で土地を耕して種を蒔く方法ではテフはまともに育たないであろう。また、繊細な茎葉の植物で、暑さと乾燥に弱く、トウモロコシやキビなどよりはるかに作りにくい作物である。エチオピア国内では標高1500m以上の比較的雨の多い所で栽培されていて、この国の代表的で特色のある主食であるインジェラの材料である。インジェラはインドのナンと同じように自然発酵させたものであり、東アフリカで一般的なチャパティやウガリ等より進化した料理法といえる。クリスマス前にハイレ・セラシエ皇帝から生きた羊1頭・最高級のテッジ1瓶・インジェラをプレゼントされたが、生きた羊はどうしようもなく庭園スタッフに贈った。宮廷のインジェラは今まで見たことのない白く柔らかい最高の品質であった。多くの一般大衆特に労働者たちは高価なインジェラはあまり食べないようである。テフはエチオピア以外の国ではほとんど栽培されていない。その栽培の難しさと収量が低いことが理由と考えられる。紀元前からエチオピアで栽培されていると言われるが、当時の農業から見るとかなり高度の技術が必要とするテフの栽培は、稲作文化と同様歴史のある一つの独特の文化ではなかろうか。

標高の高いアジスアベバに永く住んでいる日本人たちは、時々空気の濃い低地に行きたくなる。雨期のある日サバンナに近い所をドライブしていると、数十メートル先に何か赤いものが見えた。



皇太子・皇太子妃
(当時—1960年、
Jubilee Palaceの
造成中の日本庭園
にて)

車を降りて近づいてみると、それは半蔓性の植物の *Gloriosa superba* L. グロリオサの花であった。英国風庭園に必要な植栽材料はアジスアベバでは手に入らないものが多く、隣国のナイロビの園芸会社から型録を取り寄せて数種類の苗木を取り寄せた。ある日突然南ローデシア（現在のジンバブエ）の英国人から手紙が届いた。私のことはナイロビの園芸会社から聞き、連絡したとのこと。彼は種々の植物を収集しているが、いまだエチオピア産のグロリオサの原種を持っていないので、手に入れたとのこと。直ぐに数ヶ月前に見たグロリオサを思い出して現場に行った。乾期で緑の草木は全て褐色になっていたが、特徴のある蔓性の茎葉は見つかり、塊茎を掘り取った。前にグラジオラスの生態や育種を研究したことがあり、南ローデシアはグラジオラスの原産地南アフリカの隣であることに気づいた。交換条件としてグラジオラス原種の球茎を要望して、エチオピア原産のグロリオサの塊茎を送った。3ヶ月後に3種類のグラジオラスの原種が送られてきた。

日本庭園の基本設計は皇帝に承認され、細部の設計も出来たが、具体的なことはなかなか進捗しない。長さ3mの一枚板の花崗岩の橋はハラールから持ってきたし、石灯籠はイタリア人の石工に付きっきりで作らせた。約3000平方m余の庭園の周囲に植えるエチオピア原産の *Juniperus* sp. と *Podocarpus* sp. の苗はアジスアベバ南方200*。余り

のイタリア人製材業者が持っている植林地の苗床から運んできた。園内の主な樹木は日本から苗を取り寄せた。クロマツ、マテバシイ、モッコク、シャリンバイ、ヤマモミジ、ツバキ、ツツジ、サツキなどである。これらの樹木は1969年に再訪した時に、ほとんど生き残っていた。エチオピアにおける植物資源として活用されることを願っている。1960年に当時の皇太子・皇太子妃がエチオピアを訪問され、ご宿泊のJubilee Palaceの日本庭園をご覧になった。

アジスアベバ滞在中グロリオサのほか数種類の野生植物を裏庭で栽培していたが、1963年帰国前航空郵便で日本に送った。植物検疫の問題があるので、国立の研究機関に受け取ってもらう手続きをした。エチオピアを離れてヨーロッパを旅行し、1月半後に帰国した。送った植物はとっくに着いていると思って連絡したところ、1週間前に着いたばかりで、塊茎以外はほとんど枯れているとのこと。航空便で送ったつもりが（料金は航空便）船便で送られていて、3ヶ月近くもかかっていた。がっかりしていたところ2週間後に連絡があつて、*Catha edulis* Forsk. 「チャット」が奇跡的に生きていた!! チャットは東アフリカ・中近東で栽培されている、覚醒作用などのあるアルカロイドを含む植物で、エチオピアでは古くから利用されている。チャットの生産は近年急速に増加し、1980年代になって主に中東諸国への輸出量は急増した。チャ

ットの使用について知識層（特にキリスト教の）からその麻薬的作用のゆえに非難されているが、このような傾向はイエメンでも同様で、チャットの栽培増加によるコーヒーの減産を憂慮する意見もある。1990年代以降のエチオピアにおけるチャットの生産・消費・輸出の急増による経済効果は非常に大きくなっていて、輸出金額は、農産物の中で第4位である。しかしながら、チャットに関していまだ不明の点が多い。その薬理作用、医薬品としての利用価値、農学的見地からの改良の可能性等々。2000年久し振りに伊豆に行き、エチオピアからの植物を受け取っていただいた元試験場長が、

退職後近くの町に住んでおり、自宅の裏庭に株分けしたチャットを植えていて、その孫株を分けていただき、鉢植えを東京の自宅のベランダに置いたフレームの中で育てている。

<参考文献>

橋本 陸「エチオピア農業の概況」（『熱帯農業』第8巻 第2号 1965年）。

Dechassa Lemessa, “Khat: Botany, Distribution, Cultivation, Usage and Economics in Ethiopia,” 2001.

<http://saman.org.hu/ebook/engplant/dl.khat.pdf>

Seyfu Ketema, “Tef,” *IPGRI*, 1997.

<http://www.ipgri.cgiar.org/publications/pdf/279.pdf>

（はしもと・のぼる）